

配合飼料原料(とうもろこし)の 動向について

飼料生産部 飼料調達課 山下 京子

米国産トウモロコシの状況

2020年3月、新型コロナウイルスの影響から欧米各国でロックダウンが実施され、ヒト・モノの移動制限が進み、世界的な経済不安から株価が急落、穀物などの商品も売られる展開となった。

それに加え、OPEC（石油輸出機構）と非OPECの閣僚会合で原油の4月以降の減産合意に至らず、サウジアラビアとロシアが増産する姿勢を見せたことで原油の供給過多への懸念からNY原油先物（WTI）も大幅急落、4年ぶりの安値水準を記録した。

トウモロコシのシカゴ相場もこれらの影響やエタノール需要の減少懸念から1ヵ月で370セント台から340セント台まで約30セント下落した。3月31日発表の四半期在庫及び作付意向面積は、四半期在庫は減少したものの、新穀の作付面積が大幅に増えるサプライズな発表となった。

4月は新型コロナウイルス感染拡大の影響から、コーンのシカゴ相場・原油相場ともに歴史的な相場展開となった。米国経済の鈍化で精肉加工工場やエタノール工場の閉鎖、エタノール生産量／在庫量はワースト／ハイレコードを更新した。シカゴ相場は1ヵ月で更に約30セント下落し、5月限は最安値301セントを記録した。また、米国内では原油在庫が貯蔵施設の能力の限界に達するとの見方が強まり投機家が投げ売りした結果、WTIは暴落し4月20日に初めて5月限でマイナス圏に突入した。

5月のUSDA需給報告では、新穀トウモロコシの期末在庫率が20%を超え1987年以来の最大の在庫量となり、引き続き需給は緩い状況が続くことが見込まれる。また、作付進捗も順調で、5月24日時点で作付進捗率88%（昨年55%、過去5年平均82%）、発芽進捗



率64%（昨年28%、過去5年平均58%）となっている。天候相場は7月の受粉期や10月の収穫期とまだまだ続くため気を緩めてはならないが、5月末時点で320セント台を推移しており、今のところは4ドルを目指す展開にはならないと思われる。

コロナ禍と配合飼料価格

4月8日から7都府県で緊急事態宣言が出され、その後全国47都道府県に拡大した。日本全国の学校は休校になり飲食店も時短営業や自粛を求められ日本中が混乱、5月25日ようやく緊急事態解除宣言が出されたが、新型コロナウイルス流行前の日常に戻るにはまだまだ時間がかかりそうである。そのような情勢で、配合飼料価格に影響する出来事が起きている。

配合飼料には多くの食品副産物が使用されている。居酒屋やファミリーレストランなどの飲食店に卸していた米や小麦粉、調理用油やビール等の需要が減り、それらの副産物である米糠、ふすま、大豆粕やビール粕等の発生量が減少している。また、本来なら今夏に

開催されるはずだった東京オリンピックが延期となり、オリンピック需要が期待されていた清涼飲料水も製造が激減しており、コーンスターチの副産物であるコーングルテンフィードの発生も芳しくない状況である。供給がタイトな状況から7～9月期の副原料価格は上昇することが予想される。トウモロコシの価格は

幸いにも軟調に推移しているため、副原料のコスト上昇をどう抑えられるかが、配合飼料価格のポイントになりそうである。読者の皆様も、経済の回復と酪農畜産のためにも、コロナ禍が落ち着いたら積極的に外食を利用して頂けると幸いである。

